

犬物語

内田魯庵

青空文庫

俺かい。俺は昔むかしお万こぼの覆ふした油あぶらを管なアめて了しつた太郎どんの犬いぬさ。其俺の身の上咄ばなしが聞ききたいと。四つ足の俺に咄ばなして聞きかせるやうな履歴れんぎがあるもんか。だが、人間の小説家さまが俺の来歴らいれきを聞きくやうでは先生余程窮きつしたと見えるね。よし／＼一番大氣を吐はかうかな。

俺は爰こゝから十町離はなれた乞丐こじき横町よこまちの裏屋うらやの路次ろじの奥おくの塵溜ごみための傍わきで生うれたのだ。俺の母おふくろ犬いぬは俺を生うむと間まもなく暗黒やみの晩ばんに道みち路いで寝惚いけた巡行巡査じゆんぎやうじゆんさに足を踏ふまれたので、喫驚びつくりしてワンと吠うえたら狂犬きやうけんだと云いつて殺ころされて了しつたさうだ。自分の過失そさうを棚いのちへ上げて狂犬呼きやうけんばゝりは怪あやしからぬ咄ばなだ。加之しかも大切な生命いのちを軽

卒に奪^とるとは飛んでもない万物の霊だ。人間の威張臭る此娑婆^{しやば}では泣く子と地頭で仕方が無いが、天国に生れたなら一つ対^{あひて}手取つて訴訟^{おこ}を提起してやる覚悟だ。

生れて二ヶ月目位だな。悪戯^{わんぱく}な頑童^{さんざいち}どのに頸へ縄をくゝし附けられて病院の原に引摺られ、散三責められた上に古井戸の中へ投込まれやうとした処を今の旦那に救けられたのだ。

乳も碌に飲まない中に母^{おふくろ}犬には別れ、宿なしの親なしで随分

苦勞もしたが、今の旦那には勿躰ないほどお世話になつて、恰^{とん}と

応拳の描いた狗^{ちんころ}児のやうだと仰しやつて大變可愛がられたもん

だ。坊様も嬢様も無類の犬煩惱で入らつしやるから、爰^{つひ}の邸へ引取られてからは俺も飛んだ幸福^{しあはせもの}者で、今年で八年、終^{つひ}に一度餓^{ひも}

じい目どころか、両に四升の鬼の牙のやうなお米を頂戴してゐた。憚りながら未だ南京米を口に入れた事の無いお兄いさんだ。

俺の血統かい。俺は尋常の地犬サ。雑りツけない純粹の日本犬だ。耳の垂れた尻尾を下げた瞳の碧い毛唐の犬がやつて来て

から、地犬々と俺の同類を白痴にするが、憚りながら神州の倭魂を伝へた純粹のお犬様だ。西洋臭い顔をした雑種犬と

は、ヘン、種が違います。

元来俺の解らないのは無暗やたらに西洋犬を珍重する奴サ。

一つ順序でに話して聞かせやう。犬の先祖は狼だといふが、之は間違で、「ドール」といふ山犬の一種だ。今でも英領印度の西境のミドナボールからシヤマルの間に棲んでゐる。世界の文明が

悉く印度から来たやうに犬も矢張印度を母国として四方に蕃殖したのだ。尤も埃^{エチプト}及では猫と同じやうに犬を尊んで川の神と祀つて、恰度ナイルの氾濫時分にシリヤス星が見えるので、此星を犬^ドツグスター^{なづ}と名けて犬を星の精だといったものださうな。アツシリヤでも早くから犬を珍重して今の「マスチツフ」だの「グレイハウンド」だのといふ奴が在^いたさうだが、爾^そんな事は扱^さておき、我々は印度の「ドール」から進化したのだといふが学者の一致した説である。狼や「ジャカル」から発達したといふのは嘘だよ。我々同類を誣^しゆるものだよ。

処で、此「ドール」といふ奴は痛^{ひど}く人間を嫌つて決して影を見せないさうだが、敏捷活潑で頗る猟が上手である。豹のやうな木

に登るものや象のやうな図抜けて大きな身づうたい幹こみのものゝ外は何でも捕る。虎でさへが「ドール」に会つては辟しりごみ易する。無論一足と一足とでは虎には及ばないが、「ドール」君は常に大隊を率ゐて一斉襲撃するから大抵な猛虎は忽ち殺されて了ふ。中々慄へうかん悍かん決死の大將軍である。少ちつと味噌を上げるやうだが、先づ猛獸狩の功者と云つたら「ドール」先生だらう。天晴武勇の振舞は我々犬族の先祖たるに耻ぢずと云ふべしだ。

さて犬族一統の中で、此「ドール」君の風ふう丰ほうを最も能く伝へてゐるは我々日本犬だよ。耳から尻尾の具合、面かほ貌つきまでが頗る肖にておる。殊に勇武絶倫、猛獸を物ともせざる勇敢の氣象が丸出しである。恐らく「ドール」君正統の嫡流だと信じますナ。独り

日本犬ばかりでない、日本犬に似てゐる者は悉く^{きやうゆうぶさう}勁勇無双である。^{チベツトいぬ}西藏犬、「エスキモー」犬^{いぬ}、^{シベリヤいぬ}西比利亞犬、我々の兄弟分は^ど何れも力が強く勇氣があつてしたゝかな豪傑である。唯だ^た何れも未開の国で^{のはふづ}野法図に育つたお底^{かげ}に歴史に功蹟を遺すだけに進歩しなかつたが其性質の^{すぐ}勝れて伶俐で勇氣のあるのは学者に認められておる。「エスキモー」犬が雪中^{そり}橇車を牽いて数日の道を行つても少しも疲労しない事や、西比利亞犬が^{りよじん}旅人を護衛して狼や其他の猛獸を追散らす勇氣は実に素晴らしいもんだ。西比利亞では犬を「エンヌ」といふさうで^{ごいん}語音が^や稍や似通つておる。或は日本犬と同種族であるまいかといふ説があるさうだが、如何さま宛^さもありさうな事だ^{わい}哩。

それから我々は何しろ二千五百年の歴史ある国に生まれたのだからエスキモーや西比利亜の徒輩てあひと違つて立派な来歴がある。桓武天皇九代の皇胤と列べ立てゝは綴帳どんちやうの台詞染みて笑止をかしくないが、御歴代の天皇様から御鐘愛を蒙むつて恐れ多くも九重こゝのへに咫尺しせきし奉つた例は君達も忠君無二の日本人だから御存じだらう。勿論翁丸おきなまるのやうな悪戯をして君の勅勘ちよくかんを蒙むつた者もあるが、我々は先づ君の御寵愛を忝かたじけなふした方だ。歴史で一番評判なだいの愛犬家いぬずきは北条高時どのだ子。高時殿は大不忠者のやうに歴史で散さるが殖えてるが、畢竟政権与奪の争ひをして不利益の位置に立つたものが朝敵呼ばゝりをされたので、此神州に生れて誰か天子様に

三 一に悪く云はれておるがお気の毒だよ。藤原氏以来朝敵の数

抵抗^{はむか}ふ不屈者があるもんか。元来^{いつたい}政治^やを行^さるに天子様^{さしはさ}を挿^さんで
為^なやうといふは日本人の不心得^{むかし}で、昔^{むかし}日から時の政府に反対する
ものを直ぐ朝敵^{あそく}にしてうが、今でも忠君^{ちくくん}を自分達の専売^{せんばい}にした
やうな氣になつて無暗^{むあん}と反対者を不忠^{ふちゆう}呼ばはりする者があるが悪
い癖^{くせ}だ。己^{うぬ}が勝手に尊皇愛國^{そんかうあいこく}を狭く解釈^{かいさく}して濫^{らん}りに不敬^{ふけい}呼ばはり
するは恐れ多くも皇室^{こうしやう}の稜威^{れいゐ}を減^{へん}ずる憚^{はづかり}ある次第^{しだい}だ。誠に飛んで
もない咄^{はな}で、一番氣の毒^{どく}な目にあつて大悪党^{だいあくとう}の帳本^{ちやうほん}と誤解^{ごかい}された
のは北条氏^{きたうし}だよ。高時殿^{たかときでん}はどうせ家を滅^{めつ}ぼす奴^{やつ}だから難^{ありがた}有^あい人
物^{もの}ではなからうけれど、一族二百人枕^{まくら}を並べて自殺^{じそく}した最期^{さいき}は心
あるものの涙^{なみだ}を濺^{そそ}ぐ種^{くさね}だ。楠殿^{くすのきでん}が高時^{たかとき}の酒^{さけ}九献^{こくけん}肴^{さかな}九種^{くしゆ}を用^{もち}ゆるを
聞^きいて驕奢^{おごり}の甚^しだしいのを慨嘆^{がいたん}したといふは、失敬^{しつけい}ながら田舎侍^{いんがざむらい}

の野暮な過言^{いひすぎ}だ子。天下の執権ともある者が酒九献肴九種ぐらゐる氣張つたツて驕奢の沙汰でもあるまいと、俺は思ふナ。這般^{こん}な事をいふと例の大忠臣党が直ぐ犬畜生の言草だなんぞと云ひさうだが、人間様の仰しやる事が兎角御都合主義だから無慾な犬畜生の言草^{いひぐさ}が却て道理に合^{かな}つてゐる。……ホイ、話が迂闊^{うつか}り横道^そへ外れた。這般な議論は么^{どう}でも可いが、処で此高時殿が大の闘犬好きで其お底で我々は十分進歩した。闘鶏、闘犬、闘牛の類を惣^{すべ}て野蛮だといつて悪くいふ者もあるが、人間様に角觚^{すまふ}がある間は這般な事を云はれまいと思ふよ。尤も禽獸の角闘^{かくとう}は血を流すからといふが、血を流すのは俺達の勝手で、勝負といふ味は人間様の相撲も俺達の仲間の角闘も変つた事は無い。相撲が筋肉の發育を

奨励する間接の原因となると同様に闘犬は俺達の身軀を非常に強
壮にし且つ勇猛な氣象を養ふやうにした。それから高時殿と一對
の愛犬家は五代將軍綱吉公だナ。犬公方と下々々の仇口に
呼ばれた位だから無法に我々同類に御憐愍を給はつたものだ。
公の生類御憐愍を悪くいふ奴があるが、畢竟今の欧羅巴で喧
ましくいふ動物保護で人道の大義に協つてゐるものだ。手段は少
極端過ぎたかも知れんが目的は中々立派なものだ。我々は左に右
く御恩を荷つた身分だから今でも忝く思つてゐる。綱吉公は我々の
為にはエスキスト督だ子。此頃のやうな恐水病が恐ろしいからツて
濫りに不幸な浪人犬を撲殺し、歴氣とした御主人様でさへが、
能く職分を守つて吠える者は直ぐ狂犬だと誣ひて殺して了う時勢

では公の恩沢は今更のやうに渴仰するよ。現げんに俺おふくろの母親などは
 冤むじつがの咎で殺された。之が綱吉公の御代なら直ぐ敵かたきを取つて貰へた
 のだ。

我々日本犬は高時殿以降屢々角闘を奨励され、早くから田獵でんれふ
 にも用ひられたから他の野蛮国の産とは違つて、躰格も立派なら
 性質も伶俐で、殊に勇氣があつて力勝すぐれ、喧嘩けんかと狩獵かりに極めて名
 人である。人種の氣象は風土と相伴ふさうだが、我々犬族も多分
 爾さうらしいのは日本人と日本犬と何から何までが能く似ておる。
 唯だ日本人の躰格は世界中或る黒くろんぼ奴を除きて最も下等であるが、
 日本犬の躰格は世界各国の犬と比較して中等以上どころか寧ろ上
 等に位しておる。我々犬の方が遙に人間様の君達よりは優等躰格

なんだ。余り白痴ばかにして貰うまいよ。

然るに君、黒船以来毛唐の種が段々内地雑居を初めてから、人間様の間なかでも眼色めいろの変つた奴が幅を利かしたが、俺達犬社会では毛唐種だねあに暴らされてイヤモウ散三な目に遇つた。尤も毛唐種には勝れて立派な上等な奴がある。俺も頗る感服しておる。「マスチツフ」の躰格の立派なのや、「ブルドック」の剛情で馬鹿力のあるのや、「アルパイン、スパニエル」の大慈悲心に富んでるのは大和魂の俺達も殆んど我がを折つておる。だが、解らない事が一つある。人間様の中では雑種児あひのこが小さくなつてゐるが、犬の中では雑種あまでが西洋振りやがつて威張散らす。俺が朋輩にはとりの家い禽やしや牛う馬しうまの夥伴なかもでは、日本産でも純粹種は大切だいじにして雑種は賤いやしんでお

るさうだ。夫が^{それ}当^{あたりまへ}然の筈なのに、犬だけは雑種までが毛唐臭い顔付をしてけつかるは怪しからん咄だ。君達人間様が平生愛国者振るくせに我々大和^{やまとけんぞく}犬族の優等なるを忘れて外国種の下等な性質を^{うけつ}遺伝いだ雑種犬を珍重するとは何事だ。欧羅巴かぶれも爰に到つて殆んど沙汰の限りだ子。言語道断である。

純粹外国種^{だね}だつて必^{きつ}と俺達より勝れてるわけでは無い。「テリヤー」や「ターンスピット」や「プードル」のやうな奴は何所が好いんだか俺達には解らぬ。マルタ犬^{いぬ}は一名を獅子犬と呼ばれてゐるが名ばかり立派でからもう弱虫な^{けち}怯な奴だ。墨西哥犬^{メキシコいぬ}は君達の^{てのひら}掌面に載るやうな可愛らしい奴だが、俺達は何でも大きいのが好きだから小さい方で世界第一なんぞは余り下らんナ。夫から

日本にも来てゐるが、矮^{ちん}狗位な大ききで頭の毛が長く幾^{すぢ}条となく前額^{ひたい}に垂れて目を覆^{かく}してゐる「スカイ、テリヤー」といふ奴^{いつ}、彼奴^{あいつ}はどうも汚^{ちづむさ}臭^{くさ}くて、人間なら貧乏書生染^いみて不可^{いか}んな。「ハウンド」族でも英吉利^{イギリス}の「グレイハウンド」や露西亜^{ロシア}「ハウンド」は躰格も立派で中々見栄がするが、伊太利^{イタリヤ}「ハウンド」と来たら翫^{おもちゃいぬ}弄^{いぬ}犬と言はれるだけに脊の高さが一尺、重さが唯ツた一貫目——「ハウンド」でゐるが凄まじいお笑草^{ごさ}だ子。犬も国に伴^つれるもんで、伊太利のやうな美術国だから那^{あんな}様な細^きつこい纖麗^{やしや}な翫^{あそ}弄^び犬を生じたのだらう。且つ俺のやうな四つ足の分際では些^{ちつ}と生意気な言分だが、伊太利も豈^{まさ}夫にウヰダやロンブロゾが舌を吐いて論ずるほど疲弊してもおるまいが、細^こつこい瘠^せせ身代でゐなが

ら些と海軍力のあるのを鼻に掛けて東洋の獵場かいにチョツ搔かいを出し
 中原ちうげんの大豚おほぶたの分配わけまへを取らうと小癩まねな所為まねをする所は、矢張
 伊太利「ハウンド」の氣ばかり強くて随分足も達者だが忽ち疲れ
 てバタ／＼に閉口してう具合と似てゐるやうだよ。俺達そは夫れ
 と反かはつて今まで自分の力量に氣が附かず、雜種犬にまで白痴にさ
 れて段々田舎へ引込んで、支那チヤンの犬にさへ尻尾を下げて恐れ入つ
 たもんだ。之からは最もう負けるものか。鎌倉以来の負けじ魂を奮
 つて「マスチツフ」でも「ブルドック」でもさア来い。対あひて手にな
 つて見せる。

なに、大層威張ると？……威張るとも、我々大和犬族は敢て毛
 唐種に譲らない力量勇氣があるから子。元来君達からして甚だ不

心得だ。といふは自分達は失敬ながら世界を知らないで蚊の臍すねのやうな瘦腕を叩いて日本主義の国粹主義のと慷慨かうがい振る癖に、純粹日本種の加しか之も神州の産たるを辱かしめざる勇猛活潑なる我々を地犬々と輕蔑しおる。怪しからぬ撞だうちやく着な咄だ。

何だい、素晴らしい大氣 だと。そりやあ大氣 も吐かうさ。

平生君達の我々日本犬に対する待遇が頗る不満足だからね。しかし近頃それがしの宮殿下が我々の夥伴なかもを召されて浅からぬ御寵愛を忝ふするは我々の世の中に出る機運が熟したんだね。君達も平へ凡ぼ小説や平凡議論を書く暇があるなら日本人冥加に「獵之友」ににほんいぬでも日本犬主義を少と鼓吹し給へ。そこへ行くと感心なは俺の旦那だ。暫らく洋行して世界で有名な犬を能く御承知で、「ポイン

ター」や「セツター」は勿論日本人の余り知らない「シトリーパー」や「ラーチャー」種の獵犬をお飼ひになつたが、爾さういふ犬社会に通じた方が矢張日本種は中々好いと仰しやつて俺を頭かしらに都合三足御扶持ごふちを給はつてゐる。君達は碌に犬を知りもしない癖に我々を地犬々と輕蔑するが、憚りながら旦那のお邸では是でも日本犬様だよ。

俺の旦那は此位豪い方えらだから家内うちづうの方が揃つて悉皆豪いみんなや。別して感心なのは嬢様だ子。齡は十九の厄年で名は妙子たえこと仰しやる。君達に見せたいほどな好い御容貌ごきりやうだ。なに、既もう知つてゐる？ 中々油断のならない狼連だ。旦那や夫人おくさまが御心配なさるのも無理は無い。併し嬢様は滅法お伶俐りこうだから子、君達のやうな

間拔に喰はれる筈はないワ。第一、何処へかお出掛けになる時は
毎いっでも俺がお伴を仰あふせつ付かるから子、君達が指でもさせば直ぐワ
ンと喰くらひつ付く。麵包パンの一片きれや二片呉れたからつて容赦は無いよ。
人間様の方は賄賂が効くさうだが、俺達の方ぢやア逆とても駄目だよ。
握飯で騙されるやうな半間はんまな犬が此この節せつがら有るものか。

嬢様のお美くしいのは番町名代のもので学校でも一番だ。街わうら
路いの人が、若い者は勿論爺さん媼さんまでが顧ふり盼かへつて見る。
おとも

随行の俺までが鼻が高いんだ。殊に旦那と一緒に暫らく欧羅巴に
在いらしたから、毛唐の言葉も達者で黄鳥うぐひすのやうな声でベラノ
ゝお咄しなさる。其上に音楽なりものがお上手で、ピアノとかは專門しやうば
家いに負けないお伎倆うでまへださうだ。毎朝御飯前と午後ひるすぎ、学校か

らお歸りになると必きつと練習おやしらひなさるが、俺達のやうな解らないものが聞いてさへ面白いから、何時でも其時刻を計つて西洋間の窓の下に恍惚うつとりと聞惚れてゐる。庭の木立を洩れる音を堀越しに聞いて茫然ぼんやりと佇たちどま立る人も大分あるさうだ。

愈々来年は御卒業になつて二十歳はたちの花盛りだから、何れ何処へか御縁附きになるのだが、何がさて御容貌は番町随一、恐らく東京随一だらうといふ評判で、諸芸に達しおられて無類の御発明ごはつめいだから、昔しなら女御更衣といふ御身分だ。それだから表立つて親御へ申込まれる華族、豪商、権門の方を始め、何かに托かこつけて邸へ出入りする当世風の若紳士、隙があれば喰はふといふ君達狼連まで、有るはく、自称候補者の面々が無慮一万人ばかりだね。

おくさま

夫人は御心配になつて眼の廻るほどな忙がしい目をなすつて
申込人の身分財産性質等の内幕を一々詮議遊ばす。其掛りの書生
を三人新たにお抱へになつた位だ。だが、旦那は西洋で育つた方
だけに飛んだ気が捌さばけて在らつしやる。結婚は一生の大事だから
身分代の詮議は二の次である。当人さへ承知なら位置も身分も
無い君達のやうな貧乏書生にでも呉れてやると仰しやる……

これさ、爾う喜んででは困る。君達では迎も御当人の嬢様がお氣
に入らんからね、先まア糠喜びも大抵にして断あきら念めなさい。

西洋でいふ自由結婚ナ。旦那は口では仰しやらないが此自由結
婚をお許しになるのだ。邸へ出入りする若紳士が旦那への用は附
けたりで、御用が済むと直ぐ嬢様の御機嫌を伺ふ。近かごろ斯うい

ふ小説が出ましたと云つて新刊書を持つて来る。斯ういふ女の雑誌が出ましたと毎号郵便で送る。斯ういふ琴の新物しんものが出来ましたと歌や譜を持込む。斯ういふ化粧品を新しんきに輸入しましたと態わざ々ざ買つて来る。今度は何処そこに音楽会がありますと上等の切符を持つて来る。中には金子かねのある奴は此頃は斯ういふ品が流行はやりますと貴重な贅沢品を高い錢を出して買つて来るのもある。最もつと馬鹿な奴はカーボンやプラチナ板に撮した自分の写真を恭うやうしく送つて来る奴もある。イヤハヤお咄しにならんが、旦那は這こ般んな連中を寛大おほめに見て在らツしやるんだ。

一番繁く出入して当人たしか慥むこぎみに登第とうだいの栄えいを得る意つもりで己惚うぬぼれてゐるのが、大学の学士で某省の高等官とかを勤める華尾高楠はなをたかくす、

おな

全じく留学生候補の学士ださうで今は或る私立学校の哲学と歴史

の講師をしてゐる御園草四郎、自称青年政事家で某新聞のパリ

く「「パリく」に傍点」記者とかいふ大洞福弥、批評も小

説も新躰詩も何でも巧者で某新聞に文芸欄を担任する荒尾角

也、耶蘇教の坊さんだとかいふアーメン臭い神野霜兵衛、京都

の公卿伯爵の公達鍋小路行平——斯ういふ人達だよ、各

々自惚れて嬢様へは勿論、旦那や夫人の御機嫌を伺つて十分及

第する氣でゐるのが笑止しいよ。嬢様は御発明で在らツしやるか

ら子、這般なワイくがお氣に召す筈が無いサ。

旦那も仰しやつた。自由結婚は好いには違ひないが、日本のやうな国では社会の習慣が許さんから謹慎な人は婦人と交際するの

を遠慮する。又武士道德の名残で氣骨のある男子は婦人に親したまんのを主義とする。斯ういふ国柄では婦人に近づくのは極優柔な意氣地無し歟、でなくば世間を憚らない突飛な無分別者である。畢竟まり自由結婚をさせたくても婦人の交際する範圍には立派な理想の男子が入つて来ないから困ると、常々仰せられた。

其通りだよ。嬢様の撰おみたて択に預からうといふ野心満々たる面々は何れも愚劣極まつた鼻持ならぬ連中だ子。君達も及ばぬ恋の滝登りに首尾よく及第しやうといふ僥倖げうかうたう党だから断念あきらめの為め話して聞かせやう。

一番高慢ちきで忌味なのは法学士華尾高楠だ子。講義筆記をメカに暗誦やつして漸と卒業証書を握つたのを鬼の首でも取つたやうに

喜んで、得意が鼻はなのさき頭に揺ぶらさが下つてる。何ぞといふと赤門の学士会と同類の力を頼りにして威張たがる。田舎漢ゐなかもに限ツて国自慢をすると同じやうなもんだ。俺達の方では大学の学士を雑あひの種犬こいぬと名づけてる。西洋臭い高慢な顔をしておるが、実は神経が鈍くて力が弱くて體質が下等で毛並が揃はないでキャン／＼吠えるより外能ほかが無いからだ。近頃君達の仲間で法科大学の落第生問題が喧やかましいさうだ子。今のやうなメカに暗誦させる流義では云はゞ鸚鵡石あうむせきを覚えるやうなもんで何の役にも立たない。試験法の不完全は解り切つておるが、落第生の多いのは此このせゐ為ぢやアあるまい。俺には解らないが、旦那のお咄では大学の学士で一番信用の出来ないのは法学士と文学士ださうだ。天下の学問の府と云は

れる処の卒業生でありながら一番學問に不忠実なのが法學士ださうだ。華尾高楠先生なんかも法律万能を鼻に掛けて法律智識の有無を人物の標準と心得ておるが、高が五六十頁か其辺そこらの筆記物の二十冊や三十冊や吞込んだ処で大人物とは恐入つたもんだ子。斯ういふ先生方だから外國語さへ碌に出来ず、肝心専門の法律學さへ大抵はお忘れ遊ばしたやうだ。此頃は何をしてゐるかといふと役所で局長様の鼻毛を数へ奉つたかへりみち帰途は俺の邸へ来て夫人おくさまから嬢様の御機嫌伺ひだ。此奴こいつまだ卑怯な事は、俺の旦那が薩長のおほあたま大頭と御懇意なのを承知して、首尾よく嬢様を掌てのうち中に丸め込んで旦那のお引立に預からうといふ野心があるのだ。一度門閥の味を試なめた奴は電信でないと世の中が渡れないと見えて、学

校のお底かげで不相当の位置を作つたものは再び女房のお底すがに縋すがつて位置を高めやうとする。華尾先生も此このお仲間で身分のある家から女房を娶もらつて其縁に頼たつて敢果はかない出世をしやうといふのが生涯の大望だ。斯ういふ奴は女房かゝあ大明神と崇め奉つて奴隷となるを甘んじてゐるのだから、邸の嬢様のやうな温和しい美しいのでは勿躰なない、剛情で我儘で浮氣やきもちで嫉妬やきもちで其上に少々抜けてる醜面すべたを当てがつて懲らしてやるが好いのさ。嬢様は御発明だからチヤンと見抜いて在らツしやる。何時ぞやも俺が傍で聞いてゐたら、奴め得意になつて同僚の評判から局長の噂、来年は海外視察に行く運動も首尾よく成効できさうだと自慢たら〜。所が嬢様は抜からぬ顔をして、先あ爾んな事は好い加減にして少と学問でもなさい、

今の中役所を辞して責めて博士論文でも書いて見たら如何どうです、と斯う仰しやつた。先生頗るギヤフンと参つた子。なに、博士ぐらゐなら何時でもなれます、拙者は海外を实地踏査して行政上の意見を当路者たうろしやに呈出しやうと思つたですが、嬢様のお思召ほしめしなら明日にも官を辞して博士論文を書きませうと。先生之からは鉄てつめん面にノコ／＼やつて来ても、博士論文は如何ですと聞かれると、ハイ大に研究する考で目下材料を集め申すとコソ／＼と帰る。イヤハヤ豪い学士君だよ。

此咄を洩こをどり聞いて雀躍したのは御園草四郎君だ。此男も大学出身の学士で今は大学院で研究してゐる。当人の咄では官費留学生の候補者ださうだ。生涯を學問に貢献しやうといふ先生が嬢様のお

氣に入らうと頭髮をあたまをフランスをなすに刈つて香水を塗りつけコスメ
チツクで髯を堅め金縁目鏡に金指環で妙ウ容子振つた態は堪らな
い子。当世の学者氣質でかたぎ真理よりは金と女が大切だと見えて美く
しい嬢様と嫁入支度に持参金を一度に握らうといふ下心なんだ。
処で左も右とかくも学士は二人切だから他の候補者を下目に見て暗
に華尾君と競争してゐた。で、窃に自分の己惚了簡で学問好きの
嬢様は華尾のやうな俗吏がお氣に召す筈が無いと定めてゐた処へ
華尾が博士論文の催促で責められると聞いたから、先生大恐悦で
大願成就した氣になつて、或る日嬢様に向つて私も愈々らいはる来春
は博士論文を呈出しますと仕たり顔に云ふと、オヤ先まあ貴君も御
用学者になるの、博士と云ふと大層らしいが三年経つと三歳みつゝとい

ふ比喩たとへもありますから子、独乙ドイツでは犬も博士の肩書がありますと嬢様は手厳しく仰しやつた。(オイ君、独乙では犬も博士になつてるとサ、余り馬鹿にして貰ふまいぜ)。同じ事なら外国文で書いて欧羅巴の学者社会と議論を闘はせたら如何です、高たかが日本の博士になつたゞけでは折角図書館から書抜いたお骨折が無駄になりませう、オ、笑止、博士論文よりは恋の千話文ちわぶみ わたし、妾わたしのやうな拗すねもの者ものをコロリと云はせるやうに出来たら余程お手柄やと散三さんに冷かさされて有繋さの大哲学者も頭を抱へて閉口したやうだよ。それから一ト月余になるが羅甸語ラテンと希臘語ギリシヤとを陳ならべた難かしい手紙が来たゞけで顔を見せないから、嬢様漸やつと安心して先ず是で十九の厄を免れてノウ／＼した。

自惚れると妙な理窟がつくもんで、新聞記者の大洞福弥君、二学士の落第を聞いて鼻を揺めかした子。有繫さすがに妙子様頗る見識がある。学士の虚名を見破つた処は素晴らしいもんだ。何にしても権力推移の時代で徐々そろ我々の天下となる。目腐れ高等官が何だ。大学の腐れ学士が何だ。と先生意気揚々として早速凱旋將軍のやうな氣であつた。で、例いつもの調子で現今政海の模様を滔々と説いて今にも内閣が代れば自分達が大臣になるやうな洞喝ほらを盛んに吹立てた。なにしろ大洞福弥の洞喝と来たら名代のものだから子。毎ウキ週クリ「タイムス」と「評論レビュー」とで世界を吞込むといふ悪口があるが、左に右く外国雑誌を読むといふ人は猶まだ感心だよ。大洞と来たら外国語が碌に出来ぬさうだ。渠奴きやつの長処は妙に

記憶が好いので日本の新聞雑誌を読んで外国通を極^{きめこ}込むのだ。元^い来^{つたい}日本人は西洋の事情に暗い子。俺が毛唐の犬を知つてゐるほど

に中々行かんさうだ。だから新聞の外国種が余程怪しいもんだ。
ひつきやう

畢 竟 大洞のやうな先生が虚誕^{うそ}の共喰^{ともぐひ}をしてゐるので人名地名の発音の間違どころか飛んでもない見当違ひを一向御頓着なく

見て来たやうな虚誕を書く。昔しは講釈師が見て来たやうな虚誕を云ふといったもんだが、今では新聞記者が其株を奪つてゐる。

大洞が名を売出したのは人物評ださうだが、渠奴の人物評ぐらゐ虚誕で固め上げたものは無いさうだ。第一、有りもしない無名の豪傑を作つて自分の書いたものを其無名の豪傑が書いたやうに思はせて、加^{しか}之も此無名の豪傑は薩^{さつ}の元老であらうの長^{ちやう}の先輩であ

らうの或は在野の領袖某であらうの甚しきは前將軍であらうのと、飛んでもない臆測説を自分で書て世間を欺騙した腕前は中々凄いもんだといふ咄だ。借金も少しだと困るが身分不相当に沢山になると却つて借金のお蔭で生命が維^{つな}げるやうなもので、虚誕^{ちつ}も少とだと躓くが此位甲羅を経ると世渡りが出来ると見える子。処で俺の旦那がお世辞半分に新聞記者の天職を^{さか}壯なりと褒めて娘も新聞記者に嫁^やる意だと戯^{から}謔^か面に煽^お動^だてたから、先生グツト乗氣になつて早や^{むこ}賀^{なり}君に成^{なり}済^{すま}したやうな氣で毎日入^{いり}浸^びつてゐる。そこは厚^{あつ}皮^{かは}だから「政治的婦人」だの「政治家の妻」だのという論文を自分の新聞に載せて、嬢様の許^{ところ}へ送つて来る。之には嬢様も閉口なすつたやうだ。対^{あひ}手^てが名^な代^{だい}の千^{せん}枚^{まい}張^{はり}だから大抵

な三十珊さんちでは中々貧乏揺ぎもしない困り物だ。斯ういふ奴には罷まかり間違へば江戸の仇を長崎で討たれるやうな目に遇ふから何でも寄らず触らずが無事で好いと、嬢様も夫おくさま人も氣味を悪るがつて、大洞先生が大氣　を始めると何時でも音楽や小説の咄に紛らしてお了ひなさる。先生少しも御承知ないから、么麼どうも此頃の小説は千篇一律で詰りませんナ、女郎文学でごうぎゝる、心中文学でゝると欺騙して引退るだけだ。

小説家の文学者先生、荒尾角也この此咄を聞くと大喜びで、何が扱さて文学大好きの嬢様なれば文壇にたづさはる自分は必定御覚え目出たかるべしと早合点した。先生自作の小説を特に別仕立に装釘して恭やしく嬢様の御批評を仰ぎ奉ると出掛けた。すると恰も何

かの雑誌に此小説の悪評が載つたのを嬢様はお人が悪いから素知らぬ顔して見せた。批評家ツてものは口が悪いの子、貴方あなたの作を浅薄だの軽浮けいふだのと失敬だワ。妾わたくしは貴方の小説が一番好きよ、肩が張らなくツて読よみ心こころが好いツと。嬢様は荒尾君の大傑作を纏まと袍てらと間違へて在いらツしやると見える。それでも荒尾先生、御感ぎよかんを忝かたじけなくしたと心得て感涙に咽むせんで、今度は又堪らないものを作つた。何でも恋愛咄で暗に自分と嬢様の關係に擬したものださうだ。加しか之も其著作した理由いはれ因縁を仄めかして持つて来たから嬢様も呆れてお了ひなすつた。夫人おくさまも余り途方もないのに呆れ返つて馬鹿に附ける葉は無いと陰で仰しやつたとも当人知らずに其後是非とも御批評を願ひますと色好い返事を催促する意つもりで手紙をよこし

た。ナア君、君等の方にも斯^かういふ白痴^{ばか}があるか子。此奴^{こいつ}は小説家でも屑の方だらう子。嬢様も好い加減に思切らせないと這般^{かう}いふ奴が瘋癲^{きちがひ}になるのだと思召して、其次来た時に断然^{きつぱり}と、世間が煩さうムいますから当分お尋ねはお断り申します、其中お互に身が定^{さだま}りましたら改めて御交際を願ひませうと。荒尾先生、青菜に塩ですごくと歸つたが、俺も其後姿を見送つた時は可哀相になつたよ。ソラ何とかいふ雑誌に見えた「失恋の歌」——あの新艸詩は此時作つたのださうだ。それでも何処までもお目出度いか解らないのは其新艸詩を矢張送つて来たよ。万一の御憐愍^{ごれんみん}を願ふ意なんだらう。小説家といふものは斯うも未練なもんか子。俺の方では一度取損^{とりそく}なつた餌^えは二度と顧盼^{ふりむ}かんもんだ。イヤハ

ヤ犬にだも如かずといふべしだ。

一番みじめで気の毒なは耶蘇の牧師の神野霜兵衛さんだ。此人は衣なり装つくも粧みえらず外見も飾ぶくらず極朴実律義で、存ぞつこん魂嬢様に思込んでゐたが少ちつとも媚こび諛へつらふ容子を見せなかつた。それだから嬢様も此の人ばかりには真面目に交際つきあつて少しもお調戲からかひなさらなかつたが、困つた事には好人物といふだけで、學問才幹共に時代遅れだ。十五世紀十六世紀頃なら相当な人物であつたかも知れないが、X光線や無線電信の行はれる二十世紀には到底向かない男だ。えつきす併し有さす繫に牧師さんだ子。自分の恋が成就しないのを知つても更に人を怨まないで、只一匁に嬢様の幸福を祈つてゐる。夫おくさま人も嬢様もこの人だけには安心して交際つて在らツしやるが、素振に

も出さない心根を察して見ると気の毒になる。或る雑誌にをり／＼述懐めいた随筆が出るが、いつぞや嬢様は読んで涙を覆こぼして在らしツたつけ。何でも才拙つたなく学浅くして貌かたちさへ醜みにくき男が万づに勝れて賢き美はしき乙女に焦こがれて逆も協はざる恋路にやつるゝ憐れさを嘆かなつたものださうな。いつでも嬢様を尋ねるときは面おもてに喜びの色輝やきて晴々としてゐるが、其皮一重下に秘かくるゝ苦痛は如何ばかりぞと思ふと実に同情する子。嬢様も此人の真摯まじめな偽りのない真情まごころには余程動かされて同情の涙をお濺そそぎなすつたらしいが、実に御道理だ。俺も外の奴には恐い顔をして随分啖くちひ付きさうな素振をして嚇おそかしたが、此正直な神野霜兵衛さんには何時でも尻尾しっぽを掉はつて愛想をしたから、一度は麵包パンのお土産を

頂戴したことがあつた。霜兵衛さんだけは感心な豪い仁だ。自分の真情は既に嬢様に献げたから、自分は生涯妻を娶らず、永く独ひとり身で清く送つて嬢様の安寧幸福を神に祈ると云つておるさうだ。先ア斯まういふ心懸の人は珍らしい子、俺は愛の何のといふ理窟は知らないが、人間様の男女の關係を見ると俺たち犬の同類と更に違はないのだ。唯だ法律といふ難かしい定規があつて抛よんどろなく親子兄弟姉妹相姦あひかんせずにあるが、何なアに犬や猫と五十歩百歩だ。何とかいふ人の発句ほつくとかに「羨まし思切る時猫の恋」といふのがあるさうだ。それ見ろ、猫や犬の方がまだ健気けなげな処がある。此牧師さんも内心は猶まだ怪しいが、左も右とく外見みかけだけは立派だ。無暗に豪傑振つて女を輕蔑したがるくせに高が売ばい女ぢよの一顰びん一笑に喜憂

して鼻の下を伸ばす先生方は、何方かといふと却て女の翫弄ぐわんろうぶ物だ子。女に翫弄おもちゃにされて女を翫弄にした氣であるのが俺達には余程浅ましく見える。如何だい大将——女殺しを鼻の頭に揺ぶ下さげる先生、一本参つたらう。

伯爵鍋小路行平は正に斯かういふ浅ましい連中の一人だ子。御堂関白の孫大納言公時きんときから二十一世の裔えいで前の権中納言時鐘ときかねの子が即ち今の伯爵鍋小路黒澄くろすみ卿である。行平君は其嫡男そのださうで、幼名を阿古屋丸と申上げたさうだ。之はいつぞや行平君が自慢らしく家系を嬢様に物語られたのを傍で聞いてゐたのだ。行平君は二十二三かナ。猶だ勉強盛りなのを中途で学校をやめて、（いゝや落第したのださうだ）、平凡へぼ文学者の煽動おだてに乗せられて

自分は文学のパトロンとなるなどと高言しおらるゝさうだ。何しろ学問は打棄うつちやつて西鶴が么麼どうしたの其碩きせきが么麼どうしたの紅葉は豪えらいの漣さざなみは感心だのと頻りに肩を入られるさうナ。それも真面目なら貴族の道楽として芸妓げいしやを買うより勝ましだらうが、矢張浮気で妄想の恋愛小説を書いて見たいが山だから誠に困つたもんだ。処で二度か三度、今話した小説家の荒尾角也と一緒に嬢様を尋ねたら、一と目見てお誂こひへ通り恋風こひかぜがジワ／＼と身に染込んだ。元来いつたい荒尾が鍋小路どのを伴つれて来たのは自分の理想の女神を見せびらかすつもりであつたのが、行平どの忽ち恍惚うつとりとして天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と歌ひたくなつた。で、恋なればこそ止やん事ことなき身を屈して平生ひごろの恩顧を思ふて夫あの美しく

き姫を磨とりもちに周旋せいと荒尾先生に仰せられた。荒尾先生ほとほと閉口した。有さすが繫あれに渠女は約束の妻とも云ひかねて当座のがれの安請合をしたが其後間もなく御当人が第一に失恋を歌ふやうになつてからはプイと何所どこへか隠れて了つた。行平どのは根が公卿育ちの芋の煮えたも御存じなきノホヽンだから今度は御自身毎日車に召して深草の百夜通もゝよひも物かはと中々な御熱心であつた。何しろ身分は伯爵の公達きんだちである。色白の上品なノツペリとした御容やう貌ように加へて香水やらコスメチックやら白粉おしろいやら有る程のおつくりをして、お扮装なりは羽二重づくめに金の時計、金の鎖、金の指環、まだ其上に腕車くるまやら自転車やらお馬やらお馬車やら折々は故わざと手輕に甲斐々々しい洋服出立のお歩行ひろひで何から何まで一生懸

命に憂身うきみを扮やつされた。人間様の恋路の笑止をしいのは鍋小路どので初めて承知して毎日顔を見る度に俺は腹筋はらすぢが揉よれた哩わい。尤も尊い御身分の方だから、お平の長芋ながいもなどゝ悪口が出さうだが、左とに右かくお美しい、お奇麗な若殿様だ。それに学問こそお出来にならぬさうだが、小説類は何でも読んで在いらツしやる。小説に関する御議論も中々あるらしいやうだ。荒尾君の作などは毎いでも骨こ灰つばいに輕蔑けなされる、お邸の書齋には沙翁シェークスピアを初めヂツケンスやサツカレイの全集が飾つてあるさうな。たしか独ど乙文いつぶんはお読めなさらぬ筈だがゲーテやシルレルの全集もあるさうな。イプセンもハウプトマンも流行のニーチエもあるさうな。何か知らぬが猶まだく金ピカくの本が大きな西洋書棚に一杯あるさうで、

大抵な者は見たばかりで烟けむに巻かれるさうだ。其上に自転車と写真とは大の御自慢で自転車競争会や写真品評会の賛成員となつて居らるゝ。左に右く文明紳士として耻しからぬお方だ。併し色がなまつちら
 生 白 けて眉毛がチヨロけて眼尻が垂れ、少ちつと失礼の云分だがやまと
 倭文庫の挿絵の槃はん特どくに何処か肖にてゐた。第一忌いやな眼付をして生なまぬる
 緩い吻くちを利きかれると慄ぞうつと身震が出る。矢張佐渡の惚ほれぐすり葉はの効能きゝめで幅を利かせる方だから之で邸の嬢様を落さうと云ふは飛んでもない心得違ひだ。併し町人と違つて其処が大名育ちだから強あながち金子かねで張らうといふ鄙さもしい考は無いやうだが、イヤモウ一生懸命に精々せつせと進物を運び込む。俺が覚えてるだけでも真珠なまゝつはを七箇箱ななつばめた領留針ブルーチ、無線七宝しちほうの宝玉匣たまばこ、仏蘭西製の象牙骨の扇子、何

とかといふ名高い絵工ゑかきの書いた十二ヶ月美人とかの帖でふ、何れも其そ辺こちらの勸工場くわんこうばで買へない高料たかい品を月に一遍位きつは必と持つて来た子。其間には香水だとか石鹼しやぼんだとか白粉だとか舶来ふくさまの上品は能く持つて来たよ。余り貰ひ過ぎるので夫人おくさまも嬢様も心配なすつたが、呉れるものを断るわけにも行かず、断はつたとて持つて呉れば無下に返すわけにも行かず、仕方がなしに美術会で名高い美術家の彫刻した銀製の紙たばこ莚まる入れを買つて御返礼に差上げた。すると鍋小路の若殿へんじ恰で結納の品でも貰つたやうに有頂天になつて其紙莚入れを片時も離さず到る処に番町随一の美人から貰つたと吹聴して廻つたさうだ。偶然ふつと此咄が嬢様のお耳に入つたから、嬢様は吃驚びっくり遊ばして飛んでもない事をしたと後悔をなすつた。

何でも之は出来ない相談をして足留あしどめの工風くふうをするに如しかずとお
 考へ遊ばして、無暗に呉れるが道楽の若殿だから一つ無心をして
 やらうと思召し、今更に長良ながらの橋の鉋かんなくづ屑あで、井手の蛙かはづの干した
 のも珍らしくないからと、行平殿のござつた時、モウシ若様わたし、妾
 の従これまで来見た事の無いのは業平朝臣なりひらあそんの歌枕、松風村雨まつかぜむらさめの汐し
 汲ほくみをけ桶、ヘمامシ入道の袈裟けさころも法衣あづき、小豆大納言をぐらの小倉の色紙、河
 童の抜いた尻子珠、狸が秘蔵の腹鼓、どれか一つ見せて下さいと
 嬢様が甘たれると、行平殿は頭を撫でつゝ麿が家には矢大臣左大
 臣どのの歌集の外には何も無いが一つ同族を聞き合して見やうと、
 此事かなが協かなはないと恋路の綱が切れるやうに心配して歸つた。それ
 からはパツタリ来なくなつて了つたが、何か詫状のやうな手紙を

よこしたさうな。若様だけに可憐らしい愛度気ない処があるよ。

我こそと己惚の鼻を撼めかして煩さく嬢様の許へやつて来たの

は斯ういふ連中だ子。どれも之も及第しさうもない若殿原だ。且

那の仰しやる通り日本のやうな猶だ男女七歳にして席を同ふせざ

る封建道德の遺習が牢乎として抜くべからざる国で、若い女の許

へ臆面もなくノコノサイノやつて来るはどうせ輕薄な小才子

か、女の御用を勤めて嬉しがる腰拔の無氣力漢だ。偶々律儀真

方の人なら神野霜兵衛さんのやうな世間に技倆の無い好人

物だ子。真挚な思慮のある人間が誰が女の許へ来るもんかナ。

邸の嬢様は立派な御発明な方だから男に吞まれるやうな事は無い。

斯様な若殿原に茶にされて堪るもんかい。第一、俺が属いてゐる。

俺が中々承知が出来ねエや。

嬢様は毎日俺の頭を撫で、
「太郎や妾わたしは一生お前まいと離れない

よ、お前の好きな処へお前を伴つれてお嫁に行くから子、お前の好きな人が来たら妾の袂たもとをくは叩たたへて其人の傍そばへ伴つれて行くのだよ、」
と仰しやる。憚りながら嬢様の聲むこぎみ君を扶たすぶ権は俺にあるんだ。

えッ、何だと——どん麼な聲君をお世話するかと。……はッはッ

はッ、余程心配になつて来たナ。大丈夫安心しろ、君達のやうな
ノラクラ者を御世話する氣きづかひ遣つかは無いからナ。到底君達は嬢様の

やうな立派な申分の無い淑女の配偶たる權利が無いんだから子。
寧いづそ諦あきらめて人物相應に其辺そこの下宿屋か牛肉屋の女でも捜し給へ。

なに、失敬極まると。うま甘く仰しやる、内々心当りがあるくせに空そ

惚うとけてゐる子。はツはツ、大分勃然むきになつて顔を赤くするナ。
そんなら俺が氣に入つて嬢様に周旋とりもたうといふ資格を話して聞か
せやうか。

何でも無いサ。先づ日本犬にほんいぬを大切にしろ。第一、俺を大切にし
ろ。之から少ちつとロース肉の一片づつも時々持つて来い。人を射ん
と欲する者は先づ馬を射よといふ事がある。人間様のくせに君達
余程知恵が無いよ。

それから俺は小説家が嫌ひだ。小説家といふ奴は己うぬが小な眼玉
に写る世間を見て生なまざと悟りした厄介者だ。売卜者うらなひしや身の上を知ら
ずといふが、人の運命ばかり世話を焼いて自分の鼻のツイ鼻のさ
きの事が解らんの天下に売卜者と小説家だらう。売卜者は此頃

では大道に幕を張つて手紙証文の代筆を兼業してゐるが、小説家も追々と斯^かうなるんだらう。何とかいふ豪い大小説家が自作の末に代作の広告をしてゐたさうだが、徐^{そろ}く其変遷の兆が見えるらしいやうだノ。

それから俺は学者が嫌ひだ。無学者は頭から何にも知らないと云つてゐるから無邪気で罪が軽いやうだ。学者は何でも知つたやうに天地間の事を吞込んでゐるから子。学問の進歩が極点に達した時なら知らず、何も彼も多くは疑問として存して唯^{ほん}の理窟^{いひあ}の言現^らはし方を少し宛違^{づい}へた位で総て研究に属してゐる今日では学者と無学者とは相去る事幾^{いくばく}何も無い。然るに学者は世界の知識を独り背負^{しよ}つて立つたやうな氣になつて、恰^{とん}と巡查が人民に説諭

すると同じ口吻くちぶりを以て無学者に臨んでゐる。此位暴慢無礼な沙汰はない。殊に科学者は扱さておき哲学者といふ奴は多くは先哲の蓄音器である。少し毛色が違つたかと思つて能く／＼聞くと妄想組織が脳に生じたのを白状してゐる態だざま。今の学者は例へば競せりう売屋りだ子。君達も知つてゐるだらうが近頃縁日夜店に出てゐる大道競売屋、あれだよ。口上くちさきで欺騙ごまかして廉く仕入れたいかさまものをドシ／＼売附けて了うのだ。手輕に考へたいかさま學説を強むりに社会へ押売にするのは、豪い大伎倆えらい だいぎりやうで。茲ここが学者の学者たる価値しんしやうかも知れんが、俺は何だか虫が好かんだ。

政治家かい。之は俺の一番の禁物だ。今の社会は隅から隅まで腐敗してゐるが、云ふ内何うちが一番腐敗してゐるだらうと云つたら

政治家と宗教家だ子。此二つは殆んどお咄しにならん子。イヤハヤ殆んど言語道断だ、四つ足の俺達より凡そ二三段下つてるよ。嬢様の聶君どころか、最^もう既に社会に落第して居るのだが、忌^{いや}がられやうが棄てられやうが一^{いつかうかま}向係はず平氣の平左で面^{つら}の皮を厚くして居るのが恐ろしい。政治家と宗教家の評判は口を酸ツぱくするだけが馬鹿氣切つておる。

教育家かい。之が亦驚いたもんだよ。么^{どう}麼だい、四ツ目屋の事件は？

之が何れも教育界の学者様だから、あとは万事推して知るべきである。バツベツ……………

実業家、官吏、軍人、新聞記者、何れも落第者だ子。役者、芸

人、美術家、どうも虫が好かんよ。俺の窃^{ひそか}に望んで待つてゐるのは獵師だよ。どうか素晴らしい獵師を見立て、嬢様にお世話申して、新婚旅行のお伴^{とも}供をして中央亜細亜から亜弗利加あたりへ猛獸狩りに行きたいのだ。動物界の王と威張つておる獅子や虎や象や犀や鷺や蛇を対手^{あひて}に戦つて日本犬^{にほんいぬ}の鍛へ上げた伎倆^{うでまへ}を見せたものだ。なアに俺達日本犬の手際を知らんで威張くさる獅子や鷺がどれほどの力があるもんか。惜しい事をしたナ、向ふ河岸^{かし}のクルーゲルの伯父さん、最^もう少ししつかりして貰ひたかつた。だがよ、此方^{こつち}の勸進元のセシル、ローヅも豪かつたナ。斯ういふキビくした腕^{うで}節^{ぶし}の野郎に一寸^{ちよ}いと口を掛けて見たいのだ……：

えッ、何だ？ 俺達は么麼しても落第かど？。煩うるさいナ、念には及ばんよ。君達のやうなヒヨロヒヨロした、高たかはらわたが腸の無い江戸ツ子を理想とするやうな爾そんな芥子粒けしつぶのやうな根性の無氣力いくぢなし漢と俺の美くしい御発明ごはつめいな男勝りの嬢様とは提灯に釣鐘だ。及ばぬ恋の無駄な業がふもやを すよりは、妄想をデツチ上げた恋愛小説でも作つて、破鍋われなべにトヂ蓋の下宿屋の炊婦おさんでも覘ねらつたら可よからう。はッはッ、顔を赤くするナ。怒る勿な。怒る勿。其様そんな小な根性けちだから迎とても恋は協かなはねエ。之ちつから些と肝玉きもつたまを練る修行に時々吠えてやるかナ。なに、桀けつの狗堯くげうに吠ゆだと——此奴こいつ生意氣を吐ぬかす、俺を桀くの狗だとは失敬極まる——、此奴こやつめ、ワンワンくくく

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆76 犬」作品社

1989（平成元）年2月25日第1刷発行

1991（平成3）年9月20日第5刷発行

底本の親本：「社会百面相 下巻」岩波文庫、岩波書店

1954（昭和29）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「※」[#「公の右上の欠けたもの」、第4水準2-1-10] ※「#

「麿」の「毛」に代えて「公の右上の欠けたもの」、第4水準2-9

4-57]」と「※[#「公の右上の欠けたもの」、第4水準2-1-10] 麼」の混在は、底本通りです。

入力：渡邊つよし

校正：染川隆俊

2005年8月22日作成

2015年9月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬物語

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>